179 宇宙地球環境研究所（前編）— 附置研究所の歴史② —

前回紹介した環境医学研究所は、設置以来名称が変わらず、他部局との統合等もありませんでしたが、宇宙地球環境研究所は、2015（平成27）年10月に太陽地球環境研究所・地球水循環研究センター・年代測定総合研究センターを統合して創設されたものです。今回はその中から、太陽地球環境研究所の歴史を取り上げます。

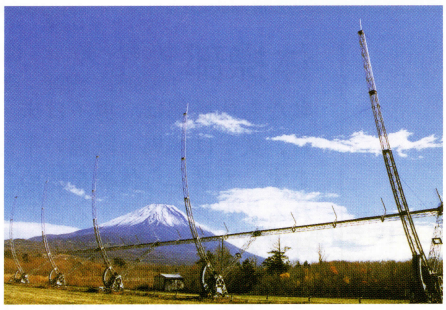
太陽地球環境研究所は、1949（昭和24）年５月の新制名古屋大学の発足と同時に、「空電研究所」として附置されました。空電とは雷によって発生する電波のことで、当時はとくに雷雲の探知技術が、航空機の安全な航行に不可欠なものとして注目されていました。名古屋帝国大学には、戦前から空電研究の先駆者であった金原（きんぱら）　淳（あつし）工学部教授が在籍しており、初代所長に就任しました。

空電研究所は、愛知県豊川市の豊川海軍工廠跡地の一部に置かれました。名古屋の東山地区は、地形の起伏が大きく空電の観測に向かないということで、すでにここには金原教授らの観測施設がありました。

空電研究所は、附置当初は２部門制でしたが、その後は研究分野を太陽電波、宇宙電波、太陽放射、超高層電磁放射などへと広げつつ研究部門の拡充が図られ、1975年には７部門制となりました。また附属施設として、1950年代から60年代にかけて４つの観測所が設置されました。その後、大気の科学的研究や太陽地球システムのグローバルな研究が求められるようになり、1980年頃から研究所の改組の検討が始まりました。

そして1990（平成２）年６月、理学部附属宇宙線望遠鏡研究施設との統合により、４つの大部門からなる「太陽地球環境研究所」に改組され、宇宙科学と地球科学に跨（またが）る日本唯一の全国共同利用研究所（のち共同利用・共同研究拠点）として再出発しました。

2006年には、本拠を東山キャンパスに移し、それまでの豊川の施設は「豊川分室」とされました。



1　1952年頃の空電研究所。豊川海軍工廠跡地は占領軍が接収していたが、アメリカ空軍が金原教授の研究に注目し、その研究に供するため、いち早くその一部の接収が解除された。そのため、空電研究所の区域には、占領軍兵士の立入禁止の標識が掲げられていた。

2　空電研究所の観測装置（昭和20年代～30年代）。

3　山梨県の富士観測所（写真は1990年頃のもの）。空電研究所時代に母子里（北海道）、鹿児島、佐久島（愛知県）、富士の４観測所が設置された。そのうちの佐久島を除く３か所に陸別観測所（北海道）を加えた４か所は、現在も宇宙地球環境研究所の附属施設として観測を続けている。

1	2	
5	3	4

4　2001年頃の太陽地球環境研究所全景（樹木で覆われている区域）。現在は宇宙地球環境研究所豊川分室となっている。

5　研究所共同館Ⅰ（2014年８月撮影）。東山移転後、太陽地球環境研究所は共同教育研究施設１号館等に入ったが、2013年に同館を建て直す形で研究所共同館が新築された。2016年にはその隣に研究所共同館Ⅱが新築されている。

名古屋大学基金

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。この基金は、平成18年3月に創設され、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業などの充実のために活用されます。ご寄附のお申し込み、お問い合わせは広報渉外課（基金事務局）あて（電話052-789-4993, 2011、Ｅメール kikin@adm.nagoya-u.ac.jp）にお願いいたします。